

## 明治日本人にとっての中国

——なぜ明治人は活躍の舞台を中国大陆に求めたか——

容 應 黄

### 一.

十九世紀中葉ペリーが日本に來航し開国を要求した時、既にアジアの国々の大半は西洋列強の侵略によって植民地化ないし半植民地化された。中国はその十二年前の阿片戦争において大敗を喫し、もう一つの大国インドも滅びてイギリス政府の直轄地となる直前であった。このような危機に直面した日本は世論が開国と攘夷に二分したが、やがて明治維新を興し、独立を守り、国際社会において列強と対等な地位を勝ち取ることができた。明治維新とは、日本を開国し、西洋化たる「文明開化」策を講じ、「富国強兵」という国家目標を達成することであると理解することができよう。しかし日本の近代史を振り返って見ると、一貫して開国を主張した幕府政権が敗れ、本来攘夷に固執した尊皇倒幕派が1864年頃から開国政策に踏み切り明治維新を断行した、ということがわかる。この尊皇倒幕派の転向を、数多くの海外の学者や評論家は日本史におけるもっとも難解な部分であると思われ、或いはこれを根拠として日本民族の豹変性を指摘している。

しかし筆者は、尊皇倒幕派が突然に開国派に転向したのではないと考える。彼らは一貫して攘夷の理念や立場を堅持したのである。1864年を境に、彼らは攘夷の方法を単なる盲目的な排外から「夷の長技を師として夷を制する」に変えたに過ぎない。「夷の長技を師として夷を制する」というのは、清末に『海国図志』を著した魏源の思想の中心的テーマであった。幕末日本の思想

家や志士達が直接魏源の思想を受容したのか、間接的にその影響を受けたのか、あるいは「内憂外患」というよく似た状況下にあったため、偶然にもその思想が一致したのかについては、本稿の論ずるところではない。本稿が強調したいのは、幕末・維新以来の近代日本史が、「夷の長技を師として夷を制する」の究極の表現であるということである。言いかえれば、維新の指導者たちの開国政策あるいは西洋化は西洋の文明や文化・価値観の根本的な受容ではなく、攘夷のための一時期の一手段に過ぎなかったのである。だからこそ、西洋と対等な地位を獲得した日本はやがて西洋と対決するように到ったのである。

1890年来日し、1896年日本に帰化して、1904年逝去するまで明治日本で過ごしたラフカディオ・ハーンも、同様の見解を次のように論じた。1894年に書き終えた「柔術」に、彼は日本の柔術を一つの思想として見なし、「攻撃し来る敵の力を誘致して利用し、敵の力に依ってのみ敵を倒し、敵の努力に依ってのみ敵に勝てという不思議な教え」<sup>(1)</sup>であると感嘆した。そして明治国家の近代化について、「其鉄道と汽船航路、其電信と電話、其郵便局と通運会社、鋼鉄砲と連発銃、其大学と工芸学校を有するにも拘らず、日本は今も一千年前と同じく東洋的であるに変わりはない。自己は少しも変わらずに居ながら、敵の力を極度に利用し得たのである」と鋭く観察し、これを「未曾有の驚くべき知的自衛法で、——驚くべき国民的柔術で」<sup>(2)</sup>あると考えた。

ともあれ、明治維新の過程において、日本は西洋的な“国民国家”を創出し、ナショナリズムというイデオロギーを身につけた。明治憲法の施行によって、日本国民は「国家と一体感をもち、国家の運命を自分できめうる立場をもつという存在になれる」<sup>(3)</sup>のである。このように、明治期の日本人は自己の運命を国家の運命と同一化し、列強の虎視眈眈たる視線のなかで新時代を創造するという大きな理想を抱き、豊かな行動力を示した。そして、数多くの明治日本人はその理想や夢の実現する場を大陸に求め、中国近代史の展開にかかわり合いをもつに至ったのである。本稿は、前述のような近代日本史

認識に基づき、二十世紀初期においてなぜ明治日本人が自分達の活躍の場として清末中国にこだわったのか、その諸要素を分析するものである。

## 二.

まず、当時の国際関係を背景として考えれば、日本が西洋列強と対等の立場となり、独立を守るためには、西洋の価値観に従い、国際社会において西洋と同じ行動様式を取らなければならなかった。当時は弱肉強食の時代であり、ナショナリズムと軍国主義が表裏一体の時代であった。このような状況下、列強から不平等条約の撤廃を取り付けるには、日本が他国に不平等条約を押しつける国力（軍事力）のあることを顕示しなければならなかったのである。従って、列強の魚肉となった中国を日本の国権拡張のターゲットとみるのはむしろ自然であった。その上日本の場合、列強に比べ中国とは距離の近さ、文化や歴史の共通性などの利点を有していたのである。まして雄大な中国大陆は長い間島国日本のロマンの対象でもあった。ただし、日本が帝国主義化して西洋の帝国主義者の仲間入りをするには、限られた権益をめぐって紛争が勃発する可能性を常にはらんでいたことでもある。さらに、西洋或いは白人からの侵略の脅威を払拭できない限り、西洋と対等な地位を獲得した後、アジアの指導者となり西洋と全面対決することもあり得ると考えるのは、屈辱的な開国を攘夷の手段と見なした明治の指導者にとっては、むしろ当然のなりゆきであろう。

しかし明治日本人の中国とのかかわり方を検討すれば、その実質は国家の興隆の表れである国権伸長よりずっと複雑で錯綜なものであった。利害関係という角度からみても、この時期の日本人は日本の国益の他に、全人類レベルの利益、所属組織の利益、さらに個人の利益をはかるといった側面があった。また、中国を活躍の舞台や理想実現の場としたとき、彼らの理想には、以下の三つの要素があると考えられる。すなわち、(1)上に述べたナショナリズムの実現としての国権拡張である。(2)人類愛という立場から中国を援助したい

気持ちである。この場合は支那保存論から、中国の改革や革命の支持、アジア解放までさまざまな表現の仕方がある。(3)明治国家のもたらした新しい社会に幻滅し、日本では実現できないことを中国で成し遂げたいという希望である。この三つの要素は相互排斥するものではない。事実、(1)と(2)との組み合わせが中国にかかわった明治日本人の中では主流であった。即ち、日本国家の栄光を中国保存やアジアの盟主になることと同一化した立場であり、本稿で取り上げる東亜同盟会上海支部幹事井上雅二はこの部類に入る。また、(2)と(3)が一体化すれば、中国革命の実現を通じて、日本の革命を期待するという立場になることが考えられる。宮崎滔天とその兄の宮崎弥蔵はこれに当たる。(1)と(3)が合わさると、脱亜入欧の明治社会に不満を抱き、西洋の物質による侵略に対してアジアは精神面で団結することによって対抗すべきだという考えになる。岡倉天心がこれである。

井上雅二(1877～1947)は義和団運動の時期に中国に滞在していた明治日本人である。兵庫県の出身で、海軍兵学校の生徒になったが退学、岸田吟の経営する楽善堂を足場に清国調査に従事したことのある荒尾精に入門し、中国語を習得した。1897年東亜会が設立された時その幹事となった。1898年11月東亜会と同文会が連合して東亜同文会となり、井上は幹事を務めた。更に1900年9月東亜同文会上海支部幹事として中国に赴任した。義和団事件のさなか、日本の利益を最優先とする前提の下に「支那保存」というスローガンを掲げる東亜同文会の上海での活動は(1)南方督撫と民間志士の連合による新政府の樹立か、(2)南方督撫も排外に参加した場合、民間志士の勢力のみによる新政府の建設、という方針のもとに行われていた。このため、上海支部長の井出三郎と幹事井上雅二は、以前から上海民間紳士グループの代表格である汪康年、文廷式、さらに保皇会系列で湖南省維新派の指導格である唐才常、上海で唐と共に活動していた狄平などに接近していた。井上は汪・唐二派の連合により成立した中国議会に大変な期待と熱意を示した<sup>40</sup>。

1900年8月9日夜、唐才常が自立軍蜂起策動のため漢口へ出発した時、井

上は同じ船で南京に向かった。南京における彼の任務は、当地の文官に対して「中国議會に一致努力せしむるの約成る」ことと、武官には唐才常の設立した「自立会の事に尽力せしむる約成る」ことであり<sup>5)</sup>、言いかえれば、唐才常ら改革派と南京の文武官吏有志との連合を図ることであった。しかし、漢口機関の秘密本部が張之洞によって摘発され、唐才常らは21日に逮捕・処刑された。このことで井上はすっかり落胆し、10月日本に帰国して以来、終身中国問題から離れた。

日本人の井上がなぜ中国の改革運動である自立軍蜂起計画に対してこれほどの理解を示し、また実際にその活動に参加して支援したのか。この問いに答えるためには井上をはじめ東亜同文会の当時の国際社会に対する認識を取り上げなければならない。東亜同文会の掲げる「支那保存論」は「唇亡ぶれば齒寒し」という「日支一体」の立場に立つものであった。つまり、西力東漸の国際社会の中、弱体化した中国が西洋列強の手に陥落すれば、日本は列強の侵略や圧力をまともに受けることになる、という認識であった。だから列強と共に「支那共同管理」あるいは「支那分割」をするのではなく、日本の安全のためには「支那保存」をしなければならないのであった<sup>6)</sup>。「抑も支那を保存せんと欲せば、先づ之を改善せざる可らず、之を改善するに非れば、之を保存する可らず、社会上、政治上共に大に改善せざる可からず、其陋習を破り、弊政を除き、其国内に凝滞したる気水を排して世界文明の新潮流を注入せざる可からず」<sup>7)</sup>として、井上は中国の改革計画に参与したのである。井上の取った行動は彼にとって、日本の国益の他に、人類愛という立場から中国を助けるという人類レベルの利益や、彼の所属する東亜同文会の利益に合致し、さらに彼個人の功業意識を満たすものであったといえよう。

宮崎滔天(1870～1922)は熊本出身である。熊本で一世を風靡した国権拡張主義的風潮の中、宮崎はむしろ例外的に自由民権思想の理想を受け継ぐ者であったと思われる。宮崎にとって理想実現の方法は俠客として権力に立ち向かい、弱者を扶助することであり、理想実現の場は清末中国であった。

つまり孫文らに協力し中国革命を成功させることであった。「若し支那にして復興して義に依って立たんか、インド興すべく、シャム、安南振起すべく、ヒリッピン、エジプト以って救うべきなり。しかしてフランス、アメリカのごとき、いささか理想を重んじ主義に立たんと欲するものに至っては、必ずしもわれらの敵たらざるやも知るべきからず。思うに、あまねく人權を回復して宇宙に新紀元を建立するの方策、これ以外に求むべからざらなり」<sup>(8)</sup>でもあった。日本では実現できない理想をまず中国で実現させ、それを基礎に日本を含む全アジアの解放を目指そうとした。

岡倉天心(1862～1913)の場合はアジアの多元性や多様性を認めながら、「アジアは一つ」と唱えた。それは西洋列強の侵略に直面した時、アジアは一つでなければならない、という考えである。現状では、「今や東洋は懦弱の同義語となり、その原住民は奴隷の別名である。……商業の名の下に我我は軍人を歓迎し、文明の名の下に帝国主義者を抱擁し、其基督教の名に於て、残酷の前にひれ伏したのである。国際法は白き羊皮紙上に輝いているも——餘すところなき不正は、有色の皮膚に黒き影を印した」<sup>(9)</sup>。そこでアジアのなすべき仕事は、「アジアの様式を擁護し回復する」ことであって、そのために「アジアみずからがまず、これらの様式の意識を確認し発達させなければならない」<sup>(10)</sup>のである。言い換えれば、アジアの復興はアジア諸国の自己認識・自己への回帰から始めなければならない。アジアは西洋文明に対して、アジアの様式において一つであり、また一つでなければならないのである。

岡倉の考えでは、アジアと西洋は究極において異質的である。西洋文明に対してすべてのアジア民族には共通の思想の遺伝がある。それはつまり「究極普遍的なるものを求める愛」<sup>(11)</sup>である。この愛は、たとえば「もの言わぬ畜生も人間と同一の高さに引き上げたところのあの慈悲の熱情」<sup>(12)</sup>であり、「アジア的寛容」<sup>(13)</sup>や「やさしさと友情」<sup>(14)</sup>である。アジアが一つとして分かち合うものは、このようなアジアの精神・アジアの内在価値である。内在価値の故に、「アジアの簡素な生活は、蒸気と電気とのために今日それが置かれた

ヨーロッパとの鋭い対照を、豪も恥とする必要はない」<sup>(15)</sup>、というのである。

「アジアは一つ」という言葉は膨張主義者たちによってかなり悪用されたが、岡倉の思想は膨張主義と根本的な違いがある。まず、岡倉思想に、日本以外のアジア諸民族に対して優越意識が見られない。岡倉が日本の誇りとしているのは、日本が「アジアの思想と文化を託す真の貯蔵庫」、即ち東洋の理想の継承者であることである。しかし継承者になり得たのは、膨張政策を取りアジアの盟主という地位を確立したからではなく、「膨張発展の犠牲として祖先伝来の観念と本能とを守った島国の孤立」<sup>(16)</sup>によったからである。

### 三.

井上雅二、宮崎滔天、岡倉天心と同時代に中国にかかわり合いをもった石光真清（1867～1942）の場合は、更に複雑である。明治国家のために諜報活動に投身した彼は、立場上は上述(1)の国権主義者という範疇に属するであろうが、彼の活動や思想を追跡すると(2)や(3)の要素も含んでいたことがわかる。

石光真清の父は熊本細川藩の産物方頭取を勤めた者で、下級藩士である石光家の身分は軽かったが、「細川公が肥後入国の時からお供をした家柄」<sup>(17)</sup>として、代々特別な取扱いを受け、経済的に苦しい様子はなかった。真清は9歳の時に神風連の乱、10歳に西南戦争を体験した。14歳に上京し、幼年学校から士官学校を出て30歳で大尉となった。しかしロシア語の習得やロシア情報収集のため、1899年に大陸に渡った。ブラゴベツェンスクでの留学の後、1900年哈爾浜で洗濯屋を開き北満におけるロシア軍の行動を監視する任務を担った。やがて軍人として栄達する出世の道を捨て、現役を退き諜報活動を行うことになった。哈爾浜で開業した写真館を中心に、満州各要所に写真館、雑貨店、麦酒会社などを開いたり、または同志の店と提携したりすることによって、日露戦前の満州全土に諜報網を完成させた<sup>(18)</sup>。

石光及び彼の手記に登場する彼の同志たちの大陸へ渡る動機について記す前に、まず彼らの日清戦争に対する認識を取り上げなければならない。「日

本は国運を賭けて宣戦しなければならなかった。維新以来、海外の経済力、軍事力が、東洋の植民地化を目指して奔りまわっていたが、日本はこれに抗して急激な近代化を断行し、このためには多くの血の犠牲もあったし、武士階級の痛々しい没落もあった。けれども日本の工業力はその近代化の点では、はるかに清国を凌いでおり、そのうちでも繊維製品は朝鮮を最大の市場として進出していたのである。急激な近代化のためには、生産機械も武器も交通機関も、輸入に仰がなければならなかったのも、この貿易収支の均衡をとるためには輸出市場の安定が必要であった。日本が朝鮮の中立と独立とを支持したのはそのためであった。しかも世界最強を誇るロシアと、眠れる獅子の清国の圧力下にあった日本としては、緩衝地帯としての朝鮮が安全であって欲しかった。この均衡が破れたのである。近代化の途上にあった日本は、植民地化の圧力に抗して独立してゆくために、重大な賭をしなければならなかったのである<sup>(19)</sup>。この戦争が欧米列強に伍して行くため、朝鮮半島を日本支配下に置くという侵略的なものだとの認識はなく、むしろ「国と国との、民族と民族との、生きる戦い、子孫のための戦い」<sup>(20)</sup>として、開国をもってまず達成しなければならない目標である自主独立の維持のための防衛戦争だと見るのであった。

清国との初めての本格的な国際戦争において日本は勝利を得たが、三国干渉に遭い、遼東半島の放棄を強いられた。「思えば当時の民間人の国家意識は強いものであった。日清戦争後の三国干渉に憤激した志ある人々は、軟弱な政府を頼むに足らずと、悲壮な気持を抱いて続々と大陸へ渡り、各自思うところに愛国の熱情を傾けていたのであった。或はまた、ロシア軍に蹂躪された満州の市場に日本の商品の販路を獲得しようとする商人や実業家も、政府機関に援助を求めるわけでもなく、単身ウラジオストックに上陸してロシア軍の動静を探りつつ、満州深く足跡を印したのであった」<sup>(21)</sup>。石光本人は三国干渉で「やがては、大ロシア帝国の侵略に脅かされて、再び国の運命を賭けて戦わねばならない時が来る」<sup>(22)</sup>と判断し、ロシア研究の必要を感じた



という。石光がウラジオストクからニコリスクに向かう三等客車の中で出会った笹森儀助という老人もまたロシアが義和団事件を口実に満州へ侵入したのを見兼ね、「わしには露西亞の行動が腑に落ちない。……これあ黙って見てはおられぬ。とにかく現地で露西亞の真意を探る必要があるわいと考えてな、誰に頼まれたわけでもないが元山から徒歩で此処まで来ましたよ」<sup>(23)</sup>、というのであった。石光の同郷で、熊本茶業組合の出張員として紅茶の輸出に従事するかたわら、朝日新聞の通信員を兼ねていた阿部野利恭も満州において石光の諜報活動を支援した。上述したように、明治の日本人は国家の運命を自分で決めうるし、決めなければならないとの認識を持ち、そのためには西洋との対決も辞さないものであった。

石光の出身した熊本では国権主義的風潮が特に強いといわれる。1891年から三年間熊本で暮らしたハーンは、次のような所感を記した。「九州は昔の如く今日も日本の最も保守的地方となって居る、そしてその主要の都の熊本は保守的精神の中心となって居る。……日本帝国の諸州のうちで西洋の風俗習慣をまねる事を最も好まないものである。……国民的情操即ち忠君愛国の念が東京といえども及ばぬ程強いと言われて居る」<sup>(24)</sup>。明治維新において熊本は薩長土肥と違って藩内意見の不一致により遅れを取った。また、西南戦争でも藩閥政府と対抗する立場に回り屈辱的な結末を迎えた。熊本のもと士族たちは国内政治を支配する権力側から除外された鬱憤を晴らすため、志を海外の大陸に向け、国権伸張の先駆者としての役を買って出るようになった。ちなみにアジア大陸に出かけていく伝統は長崎や熊本方面の九州においては古くからあったといわれる。従って、石光の大陸指向というものは、明治国家という時代背景、熊本という特殊な地方的背景、さらに士族の出身で、少年時代から軍人志望という彼個人の背景など、様々な要素が絡み合っていたものであろう。

1900年7月ロシア国境都市ブラゴベシチェンスクで起きたロシア軍による中国人市民の虐殺事件について、国権主義者の石光はそれを清国政府の「無

統制、無計画、無思慮」<sup>(25)</sup>によるものとして、清国政府の責任を問題にした。「清国をいまのままで放って置くと幾回こんな無謀な事件を惹すか判りません」。彼はさらに帝国主義列強側の理論を展開し、「清国を文明国にしてやること、多少の血を流しても清国を文明国にしてやるのが文明先進国の義務でもあるし権利でもあると思います。そうじゃないでしょうか。この理想があって初めて血の懲めも神から許されるのでしょうか」<sup>(26)</sup>と、ロシアのための弁解にも、石光本人が日清戦争後の台湾征伐に参加したことへの弁解にも聞こえるものであった。

ところが、石光には諜報工作者特有な暗く、陰湿なイメージが全く感じられない。また日本の国権主義者に日清戦争以来特に見られた中国人や朝鮮民族に対する蔑視の傾向もない。彼の手記には人間としての暖かさ、自分の悩みや弱みを粉飾しない誠実さが溢れ、読者に感動を与える。その一例として、幼年学校から士官学校まで石光の同期であり、朝鮮人留学生の朴裕宏の自殺事件がある。朴は士官学校全校生徒の前にモルレンドルフという朝鮮に帰化し高官になった元ドイツ人から激励の言葉を受け、その屈辱に耐えきれず間もなく自殺した。朝鮮使節が来訪した夜、寝台に伏して泣いていた朴に対して、日本人学生達は理由を聞いたが朴は答えなかった。石光はこのように記した。「考えて見れば、何故であるかを問うことさえが彼には堪えられない辱しめであったに違いない。独逸人が政府の高位に就いて使節として日本との外交折衝に当たり、自分呼び出して衆人環視の中で激励の言葉を与える……同期生に対しても、上官に対しても、朝鮮人として忍び得ない侮辱を感じたに違いないのである」<sup>(27)</sup>。朴は日頃から朝鮮には既に亡国の兆しがあり、清・日・露のいずれかに併合されるだろうと悲観していた。モルレンドルフの来日でついに将来を絶望し死を選んだのであろうと真清は考えた<sup>(28)</sup>。また1895年台湾征伐で初戦闘の体験をした時、石光はしばしば中国人女性兵の死体を見た。「これを見るたびに、日本軍に対する住民の憎しみの強さを感じ、今後の戦いも容易でないことを知った」<sup>(29)</sup>。このように石光は日本人側

というよりは、相手国側の視点から思考していたことがうかがえる。

石光は民衆に情の厚いところがあった。彼の手記にはこれまで述べてきた「憂国之士」「志士」とは全く別の部類に属する明治日本人が登場している。つまり、ウラジオストクにいた女郎屋、洗濯屋、ペンキ屋、理髪屋<sup>(30)</sup>；ブラゴベシチェンスクにいた洗濯屋、女郎屋の主人、ペンキ職人、女郎衆<sup>(31)</sup>；哈爾浜での女郎屋、小料理店、理髪店、洗濯屋、時計修繕工、写真屋などの職業の者<sup>(32)</sup>；更に、東清鉄道工事のための労働者<sup>(33)</sup>。これらの人々の滞在は、ロシアがシベリアや満州開発にあたり、日本の貨座敷業者と労働者を歓迎した結果であったといえよう。その中に、石光のように諜報活動をカムフラージュした者は無論いたが、大多数は貧困なゆえに、故郷から溢れてきた一般の庶民であった。女郎屋の女性で「在留邦人にも頗る受けが悪く、一人の同情者もありませぬ。支那人の妾となって韓人村に居るというが訪ねて行った者もない。日本人でありながら、日本人の魂も持たぬ呆れ果てた女」<sup>(34)</sup>というお君がいたが、石光は彼女と親しくなり彼女を通して中国人馬賊頭目増世策の援助を受け、哈爾浜へ潜入できたのである。

女郎衆など弱き者を搾取し、食い者にするような人物も、石光の手記に登場している。女の取引をする商人は「白米の商人」と呼ばれ、女性の需要があると、彼らは「至急白米幾袋何処々に送れ」と打電して呼び寄せるのであった。石光はこれに対して「女共は一個の商品として扱われ人間とは見做されていない。不憫な話だが女等もまた自分達を商品と考えている」<sup>(35)</sup>、と憤慨していた。また、遮湖里の港で取調を受けていた長崎出身の相良徳太郎は、表面は輸出商であるが、天草、茂木、古城の田舎娘を誘拐してシベリアや香港、シンガポールに輸出することを本業としていた。石光は彼を「悪漢相良」と呼び軽蔑している様子であった<sup>(36)</sup>。逆に、石光は一般に「醜業婦」と在留日本人から侮られる女郎屋の女性達とは心の暖まる交流をし、彼女らを助けたりしたのである。

石光の関心や同情の対象としての民はロシアや満州に在留している日本人

だけではなく、国境線を越えていたものであった。そもそもハバロフスク滞在中の彼は日本人の宿屋東洋館よりも汚い支那宿に宿泊することが多かった。馬賊に同情し彼らと親交があり、現地の民の中に入って行くような行動が多々あった。ブラゴベンチェンスクで起きたロシア軍隊による中国人市民虐殺事件について、彼は確かにロシアの動機を正当化するかのように、その責任を清国の「無統制、無計画、無思慮」の挑発行為とした。しかし罪無き三千の市民を無差別に虐殺する行為自体にはおののき震えていたようである<sup>(37)</sup>。理屈の上では列強の立場に立ち清国政府に批判的であっても、心情的には清国民衆に同情的であった。

はじめて汽船で哈爾浜に行った時、彼はロシア兵が無理矢理に乗客を船中に詰め込む様子を見て次のように辛らつな所感を吐いた。「実際露西亞人は、支那人や韓国人の苦力などは人間とっていなかったからこんな待遇も当然だったろう。形は人間だが使い道は牛馬と変りなかった。唯だ異うところは牛馬は飼料をあてがってやらねばならなかったが、人間の形をした此の牛馬どもは夫々飼料をかついでやって来て自分で始末してくれることであった」<sup>(38)</sup>。支那街の貧民窟に出入りをし、「頼まれもせんに死人の唇を両手でうやうやしく拵げて……接吻でもするように自分の口を近づけて、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと念仏を吹きこみ始めた」という在留日本人から敬遠されたウラジオストク本願寺の清水松月師には親近感を覚えていたようであった<sup>(39)</sup>。

馬賊など中国の体制側からはじき出された人間との交わりは、彼らの活動について進言できるほど深いものであった。1900年義和団の乱に乗じて満州に進出してきたロシア軍を追い払うため、寧古塔の駐屯軍（官軍）は馬賊頭目増世策に協力を求めてきた。その決断に苦悩する増に対して、石光は今まだそのような時機ではないので、せめて5年間を辛抱するように、と次の反対意見を述べた。「今日のように頭目の間に行動と情報の連絡が不十分では強力な露軍に立向うことはできません。これが第一です。第二に武器が幼稚

です。第三に露軍に対してばかりでなく日本に対して英国に対しての知識が足りません……今はじっと殻を閉じて力を蓄えねばなりません」<sup>(40)</sup>。しかし、1904年日露開戦を前にした時では、石光は増世策が先輩として遇する賓州の高頭目の配下である王爾宝に「兼て約した時が到来した。この機を失してはならぬ。……かくなれば露国官憲は日本に対して全力を挙げることになり、貴下等に対する取締は緩むに違いない。志を達する最善の機会だ」と彼らの決起を促した。石光本人もこの決起に参加し、参謀となりロシア軍の背後を脅かし、その作戦を妨害する計画があったが、王からの返答がついになく、石光は帰国したのである<sup>(41)</sup>。

最後に、石光の人間味を見事に表した一例を挙げておきたい。一面坡で最愛の家族が馬賊とロシア軍の侵入で失っていた孤独な老夫婦の家に泊めてもらった晩のことを、石光はこのように記した。「夜は更けた。不幸な老夫婦も寝についた。私の心は乱れ涙がにじんで来た。遠く東京に残して来た年老いた母と病弱の妻に、近況を知らせる手段もなく、定めし心配していることであろう。……動乱の中に身を置いている身には、親子、兄弟、夫婦のこまやかな情愛などは、いつしか縁のないものになってしまった。こころの荒れ果てた今日のさまが恐ろしくもまた情けないものに思えて、たあいなく涙が流れ出るのであった」<sup>(42)</sup>。

#### 四.

冷戦構造が崩壊し、いわゆる東西均衡の変化は国際システムのいくつかの前提を変えた。これまでの「敵か見方か」という枠組が崩れたことを契機に、これに代わる国際関係の新たな指標が必要となってきた。日中関係においても新しい時代にふさわしい新しい関係のあり方を模索しなければならぬ。近代以来の日中関係史に遡ってとらえ直していく作業は、新しい展望をもたらしてくれるはずである。

従来の日中関係史研究では「善か悪か」「支配か興亜か」「侵略戦争か解放

戦争か」といった二分法が主流であった。中国側は日本の明治以来の帝国主義的進出や侵略という側面を強調し、日本を加害者として全面否定している。一方、日本側は罪意識に由来する中国一辺倒か、逆に中国の主張を否定し日本がアジアの解放者であったという側面を評価する、といった両極端的な見方が支配的である。それゆえ、両国の近代日中関係史のとらえ方に「歪み」が生じているのである。本稿は以上の反省を踏まえた上で、近代日中関係史の出発とも言える明治期の日本と中国とのかかわり方をより客観的、全面的に把握しようとするものである。

なぜ明治人は活躍の舞台を中国大陆に求めたのか。本文で取り上げた井上雅二、宮崎滔天、岡倉天心、石光真清を分析した場合、利益という視点からでも、理想という視点からでも、国際関係、国内政治情勢、国家政策、社会環境、個人の理念や志向など多様な要素が入り組んでいることがわかる。「アジア主義者」といったような概括的な用語で説明するのは妥当ではないといえよう。

それでは、明治人と中国大陆とのかかわりの歴史的役割をどう認識すべきか。日清・日露を通じて、明治日本国家が近隣国家を侵略し、植民地支配を行なったのは紛れもなく事実であった。そればかりか、中国をはじめ近隣に対する蔑視観が形成されたのもこの時期であった。そのため、日本人が中国大陆においてその権益を拡張しようとした場合、あるいはその理想を実現しようとした場合、彼らは中国との対等な連帯という立場に立たず、中国を日本と対等な主権国家として認めず、あるいは中国国民の権益との調和を無視するようになった。言いかえれば、中国という存在への差別意識と中国に対する理解の無さが近代日中関係における悲劇を生んだ決定的な原因であったといえよう。

しかしながら、日清戦争と日露戦争について、明治日本人は日本国家が列強帝国主義と同じようなやり方で中国や韓国を侵略したという認識はなかった。むしろ列強の侵略に対抗し、日本の独立をを守り保身や防衛のために行

ったものであったととらえた。事実、日露戦争の勝利は日本の列強との対等な地位を確立しただけでなく、中国や他のアジア民族には白人支配の神話を打ち破る成功例を提示し、希望を与えることになった。そのため、中国の国土で行われ、中国の権益が戦争の目的であり、中国の主権が全く無視されたはずのこの戦争に対して、当時の中国青年は日本の勝利をわがことのように喜んだ。明治日本は中国革命・改革派、青年学生の亡命先や集合地になり、また最新の思想や情報を中国に送る発信地にもなった。こういった中国の明治国家をモデルとし、明治日本に対する尊敬や期待の気持ちは、逆に日本の中国蔑視を強める結果となった。明治日本人は近隣国家への侵略という事実から目を逸らし、アジアのために日本は列強と対抗していると思込むことまでなった。

このような主観的歴史認識と客観的な歴史事実とのずれはそのまま大正期・昭和期を経て、今日まで引きずってきている。確かに明治期に限定して言えば、当時の国際情勢からして、日本は欧米列強と帝国主義同士として戦い、また戦わなければならなかった、という見方もできよう。しかし、昭和期の日中戦争や第二次世界大戦にまでも同じような主観的な歴史認識を通用させようとすることはできない。日本は対中国侵略の日中戦争の泥沼から抜け出すため、中国への補給ルートを切断する目的で北部仏印に進駐し、また石油など「重要国防資源ノ急速獲得」のためさらに当時の蘭印を侵略する計画を対米開戦の前からしていた。だからアジアのために欧米と戦ったことでもなければ、欧米との戦いでたまたまアジアが戦場になったことでもなかった。しかも、対欧米作戦で日本は第二次世界大戦に参加し、自由主義対ファシズムの戦争において、日本はファシズム側に加担することになった。今日になっても「侵略戦争ではない」とか、「アジアではなく、欧米と戦争した」というような発言がしばしば聞かれる。それらは、以上の歴史事実をすべて無視したものであり、「夷の長技を師として夷を制する」という十九世紀的歴史認識を二十一世紀に持ち込もうとするものである。その時代錯誤は

甚だしく、内外から非難を浴びて当然であろう。

しかし、結果的には日本帝国主義の中国アジア侵略と植民地支配の時代であったが、それを総合的に見た時、果たして主観的善意というものが全く認められなかったのだろうか。一つの例外もなく全部「悪」であったのか。著者はそのような結論に帰結することはできない。石光真清の手記に見られるように、与えられた運命、あるいは個人の力では逆らえない運命の中で精一杯、誠実に、善意に満ちた生き方をする者が多くいたはずである。いくら国家全体の政策が侵略であったとしても、このような個人の誠意や善意を抹殺したり侮辱したりすることはできない。逆に、個人レベルの善意や貢献が見られたからといって、国家全体レベルの政策を正当化することはできない。従って近代日中関係史を再構築する際、つねに「光」と「影」が同時に存在していた、ということに十分留意すべきであろう。

## 注

- (1) 「柔術」『小泉八雲全集』（第一書房、1930年）第5巻、173頁。
- (2) 同前書、176頁
- (3) 司馬遼太郎『「明治」という国家』（日本放送出版協会、1989年）296頁。
- (4) 井上雅二と自立軍蜂起事件との関わりについては、近藤邦康解題、近藤・藤井友子校訂「井上雅二日記」『国家学会雑誌』98巻、1・2号、146～178頁収録を参照。
- (5) 「井上雅二日記」、8月18日、167～168頁。
- (6) 『東亜同文会史』（霞山会、1980年）、51頁。
- (7) 同前書、53頁より引用。
- (8) 宮崎滔天『三十三年の夢』（岩波文庫770、岩波書店、1993年）78頁。
- (9) 「東洋の目覚め」『岡倉天心集』（明治文学全集35、筑摩書店、1968年）65頁
- (10) 「東洋の理想」『岡倉天心集』、59頁。



- (11) 同前書、6頁。
- (12) 同前書、20頁。
- (13) 同前書、21頁。
- (14) 同前書、58頁。
- (15) 同前注。
- (16) 同前書、7頁。
- (17) 石光真清『城下の人』（石光真清の手記、中公文庫、1978年）17頁。
- (18) 石光真清『曠野の花』（石光真清の手記、中公文庫、1978年）317頁。
- (19) 『城下の人』、257～258頁。
- (20) 同前書、307。
- (21) 『曠野の花』、233頁。
- (22) 『城下の人』、307頁。
- (23) 石光真清『課報記』（満州日報新京本社出版部、1944年）41頁。
- (24) 「九州学生」『小泉八雲全集』第5巻、40頁。
- (25) 『課報記』、20頁。
- (26) 同前書、25頁。
- (27) 『城下の人』、208頁。
- (28) 「思い出の記」（石光真清未公開手稿）2巻、157～158頁。
- (29) 『城下の人』、287頁。
- (30) 『曠野の花』、10頁。
- (31) 同前書、20頁。
- (32) 同前書、176頁。
- (33) 同前書、63頁。
- (34) 『課報記』、105～106頁。
- (35) 同前書、176～177頁。
- (36) 同前書、287～288頁。
- (37) 同前書、20～25頁。
- (38) 同前書、111頁。

- (39) 『曠野の花』、17頁。
- (40) 『謀報記』、91頁。
- (41) 同前書、390頁。
- (42) 『曠野の花』、223～224頁。

(付記)

本論文は亞細亞大学アジア研究所研究プロジェクト「近代日中関係史の研究と資料」の研究結果の一環であり、1994年10月国際日本文化研究センターと国際交流基金の共催による「日本研究・京都会議」にて発表した報告を加筆訂正したものである。